
- 2 -

nobody

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「2」

【Nコード】

N2599W

【作者名】

nobody

【あらすじ】

夏の終わり。夕闇の中に佇む微かな出来事。

小さく揺らぐ「赤」が、目を閉じても消えずに残っていた。

序章　踏切

夏の終わり。夕闇にそまる赤紫の空の色。

沈みかけた夕日に照らされて道路脇のアスファルトの隙間から茂る雑草は黒いシルエットを生み出していた。

夏の虫と秋の虫の鳴き声の波長が一致する。虫の鳴き声以外はひどく静かな場所に、一人の少女が佇んでいた。

黒く長い髪は茹だる風に靡かれてバラバラにそよいでいた。セーラー服が風に煽られる、左手に握られている学生鞆には何も入っていないのか、風に吹かれるだけでぐらぐらと動いてしまう。

右手に抱えられているのは、花束。色彩豊かな花は綺麗に包装されて少女の手の中に納まっている。

突然、踏切の遮断機が鳴り響いた。一定のリズムを刻んで、鈍く重く低い音でそれは響く。

赤いライトが点滅を始める。その赤すら空の色に溶け込んでしまいそうになっていた。

重い鐘が響くように、警笛は鳴る。さながら斬首台の上で踊らされている気分なのだろう。

黄色と黒の二本の遮断桿がゆっくりと降ろされていく。ギチギチと鈍い音を立てながら、警笛を響かせながら。

少女は線路の真ん中にいた。遮断桿は既に降ろされ、間もなく電車が通過するであろうというのにも関わらず、動く気配を見せない。よく見ると、線路の外には革靴が綺麗に揃えられていた。そして少女の足は黒のハイソックスだけで、履き物は無い。

腹の底から響き渡る低音。鉄の車輪の音が、徐々に近づいてきている。

黄色いライトが弧を描いて少女の視界に現れた。風を巻き込んで、

鉄の塊が猛突進を繰り広げる。

電車の運転手はようやく少女の姿に気が付いたのか、さっきまでの静寂とは裏腹に耳を塞ぎたくなるような金属音が鳴りだした。

電車は減速すら出来ずに少女の目の前まで迫ると。

その時、少女が振り向いた。

二つの眼球を剥き出しにして、生気の抜けた真っ白い肌、血の通っていない紫色の唇を釣り上げて。

笑った。

少女がいた場所には何も無くなっていた。大きな赤い水たまりと吹き飛んだ踝から下の足以外は。

赤い水たまりは踏切の外にも飛散していて、少女が脱ぎ捨てたであろつ革靴にもべつたりと張り付いてしまっていた。

通過した電車は第一車両の半分が赤く染め上げられていて、黒い毛髪やら臓物やらがへばり付いている。

少女の右手に抱えられていた花束は衝突で散らされて、血に染まった赤い花びらが舞い散っている。

一人の少女が死んだ。自殺としか見て取れない方法で。
やがてそれは町中の噂となるだろう。

つまり、夏の終わり。物語の始まり。

一章・日々

夏の終わり。炎天の下で茹だる大気を吸い込む学生達。

燦々と降り注ぐ日光にジリジリと照りつけられて、全身の毛穴から汗が滲み出る事は免れない。

太陽の光を浴びて純白に光る彼らの夏服も、数分後には汗で滲んでしまっている事であろう。

白塗りペンキの鉄製の朝礼台。やや健康管理に問題有りな学校長がハンカチ片手に演説を始めて二十分は経過しようとしていた。

つまらない、芯の無い自慢話を永遠と聞かされて、退屈しているのはきつと学生だけではなかったはずだ。

学生達の綺麗に揃えられた列の中からポツポツと話し出す者も出てくる頃。

「今回で四人目なんだってね。女子どもばかり狙うなんてキモいよねえ」

「その子、右目をやられて失明したんだって。信じられない」

「私たちも気をつけないといけないよね、最近物騒な事が多くて嫌になっちゃう」

言葉はやがて波紋を広げ、ざわざわと学生の列が乱れ始める。担任がそれを抑制しようとして列の中に割り込むも、まるで効果は無いように見えた。

ざわめきが列を満たす中、一人の少年だけはまるで動じる気配が無い。

白いワイシャツに紺色のベスト、学校指定のベルトを詰めて着用しているところから、かなり細身の体系なのだろう。

白い細腕にシミの痕は一つも無く、つまり日に焼けた事が無いのを示している。

染めた事の無い真っ黒い質の良い髪の毛。奥二重の女性的な顔立

ちから温厚に育ってきた事が窺える。

その少年だけは、ただひたすらに前を見据えていた。

§

チャイムの音が鳴ると共に生徒達が教室の中に戻ってきた。賑わいを戻す教室、その中で一人静かに自分の席へと戻る少年。

長い朝礼が終了を迎え、周りからは不平不満ばかりが飛び交っている。そんな中で表情の無いまま鞆の中から一冊の本を取り出していた。

夏期休暇というには若干早い終了で、新学期を迎える生徒達。しかし中には新学期すら迎えずに終わった生徒もいた。

本を開く前に追う目線の先。乱雑ながらも列を成している机の中に一つだけポツカリと空いた空間が存在していた。

以前そこには机があった。鞆もあって靴袋もあった。でも今は跡形も無く片付けられていた。

それは夏の終わり、一日だけの登校日に知らされた事実。

あきはみつ

秋庭美羽が死んだ、自殺という体を取って。踏切で、線路の真ん中で立ち尽くして、そして轢かれたらしい。

なぜ、どうして死んだのかは誰にも見当が付かない。夏休みが始まる前の秋庭美羽は元気で温厚な少女だったからだ。

虐められていたという話も聞かない。だから周りの生徒はそれを不審に思っていた。秋庭美羽と仲良く接していた友人も、彼女が死を迎えると手のひらを返したように彼女に辛辣な言葉を投げかける一部では自殺ではなくて、誰かに殺されたんじゃないかという噂すら広まっていた。しかし、それも新学期を迎えれば誰も覚えていない。

誰も覚えていない事は、存在しない事になるのだろう。つまり秋庭美羽は存在を抹消された。

残酷であるが、当然でもある。

少年が住む町、神風町にはそんな黒い噂が蔓延っている。しかしなぜそのような噂が多く出回るようになったのかは誰も知らない。その噂はもっぱら中高生の話のネタにされがちだが、町の自治体や警察はそれらを「変死」やら「行方不明」で片付けてしまう。

例えば、自宅の庭の犬小屋の中で変死を遂げた男。冷蔵庫の中に切断した自分の乳房を冷凍保存した女。十三回死んだ男。野良犬、野良猫を生きたまま食べる過食症の女。

神風町ではそのような黒い噂ばかりが流されていて、もはや数え切れないくらい。

おそらく秋庭美羽の不可解な自殺も「黒い噂の一つ」として息づく事になるのだろう。秋庭美羽という一個人ではなく。

どうでもいい。そんな事を思いながら少年は視線を本に戻すと、静かな吐息を吐いてそれに集中を向けた。

「マサキ、お前また本なんて読んでいるのかよ？」

その瞬間に見知った声。頭が痛くなる気がした。

少年、マサキは僅かに顔を上げると声の主の顔を見上げた。小麦色に焼けた肌、茶色に染めた長めの髪が特徴的だ。

鋭い目つきに首からは金属のアクセサリをぶら下げている。左耳に空けたピアスの穴で、その人物がどれだけ夏にはしゃいでいたかが窺える。

マサキは冷たい目でその男を眺めた。

「僕が本を読むのは今に始まった事じゃないだろう？ 集中するんだから、悪いけど用があるなら後にしてくれ」

その姿を一瞬でも早く視界から遠ざけてくて仕方なく思っていた。しかし男は軽い笑い声を上げるとなおもマサキに絡んでくる。

「いいじゃねえかよ、小学生の時から付き合いいじゃねえかよ。俺ら。少し聞いてもらいたい話があるんだ」

いい加減にしてほしい。そうやって睨みつけて声を上げようとした時に、気が付いた。

「タカヤ、お前その腕どうしたの？」

始めてマサキは驚いたように男に声をかけた。タカヤと呼ばれるその男は自分の右腕には包帯が巻かれていて、僅かに膨らんでいた。本人はそれを隠していたようだが、実にバレバレである。

「ああ、これ？ 夏にバイクを運転したら事故って折った」

実に簡潔、そして頭の悪い回答だ。マサキはまた頭を抱えた。

タカヤとマサキは小学校からの知り合いで、昔は二人でよく遊んでいた。

マサキは昔から他の子ども達にいじめられる事も多く、その度にマサキを守っていてくれたのが、タカヤ。

そのタカヤは中学に入学すると段々と昔の姿を変えていって、今ではすっかり不良の見た目だ。しかしそれでもマサキを友達だと思ってくれているようで、マサキにしてみればそれが嬉しかったり面倒だったり。

ようやく本を閉じて、タカヤの用件は何なのかとマサキは尋ねる。

二章　恋川

夏の終わり、夕暮れ時の薄暗い闇の中。

電灯に照らされてぼうつと浮き彫りになるのは町の景色。

赤紫色を引き延ばし段々と赤色が地平線に延びている空。その色に比例して地上の景色も赤みがかって見えていた。

交通規制のひしゃげた看板が夕闇をまとうてその身体をどんどんと冷たく冷やしていく。

夏の大气と秋の大气が入り交じったこの場所で足音が反響していた。

その日、マサキは愛犬のハクを連れて散歩に向かっていた。ハクを繋ぐ赤いリードは夕闇に照らされてさらに赤く染まって見える。

マサキはハクとの歩調を合わせるように若干小走りで道を進む。

途中、訪れた潮の香りが漂う海をじっと見つめていた。

海面は沈み行く夕日を反射して橙色と紫色の中間のような色に染め上げられていた。そしてその縁をなぞるように海岸線はさらに濃い赤で描かれている。

浜辺の向こう側に覗く三本の風力発電のための風車もゆっくりと回っているだけで、果たして本当に発電を行っているのかどうか甚だ疑問である。

ハクに強引に引つ張られてマサキは無理矢理その場から離された。本当はもつとこの景色を眺めていたとも思っていたのだが、どうやら時間が許してくれないらしい。

ふと、朝の時にタカヤが頼み事をしてきた事を、マサキは思い出していた。

遠くでカラスの鳴き声が聞こえた。一匹じゃない、何匹もの声が空の上に残響する。

マサキは僅かに力を加えて急ぎすぎているハクを抑制しながら、

とある場所に向かっていた。

その場所に近づけば近づくだけ、心臓の鼓動は速まり、気分は鬱々となっていく。そのマサキの姿を嘲笑うかのように空の上の半月が徐々にはつきりと見えてきた。

やがて目的とした場所に到着して、そして止まった。ひどく高鳴る鼓動を必死に抑えて、全身の血液が流動するのが分かるみたいで吐き気を催した。

そこは踏切。赤いライトが点灯を始めて遮断機が降り始めていた。踏切のすぐ脇には空の牛乳瓶の中に萎びた花が数本埋けられているだけで、およそ最近人は手入れた跡は無かった。

つまりここは秋庭美羽が死んだ場所。今でも線路側には血の跡がこびり付いていて、水で流しても消えなかったのだろう。

ハクが荒い息を吐きながらマサキの顔色をじつとうかがっている。しかしマサキ自身の顔には何の表情も浮かび上がってこない。ひどく不安定なそれ、踏切の赤い光が夜を撫でた。

電車が通過した。轟音と共に風を吸い込みながら。その吸引によってついつい手を伸ばしてしまいそうになって、怖くなってやめた。高速する電車。車両と車両の僅かな隙間からほんの一瞬だけ、向こう側の景色が見える。

その時。向こう側の景色にさつき見た物とは違った景色が見えた。背筋がひんやりとして、轟音にまみれた筈の空気は凍って全てを遮断しているようだ。

妙な違和感に息が詰まる。遮断された空間に鈴の音が聞こえてくる。外側から聞こえてくるといふよりも、内側から聞こえてくるに近しい。

遮断機の向こうに赤い服を着た髪の長い人が二人いた。夕闇の影にその顔は黒く沈んでいる。その二人は、手を繋いでいるように見えた。

心臓の鼓動が辺りに木霊する。

電車が完全に通過して、風のうなる音だけが後に残っていた。踏

切の向こう側には誰もいない。それはマサキの錯覚だったのだろうか。

「こんばんは、須藤君」

背後から突然声をかけられて振り返る。綺麗なソプラノに反応して風の音が残響した気がした。

マサキはその声に違和感と驚きを感じながら、声の主を凝視する。揺らぐ視界の中で、その姿を見た瞬間に記憶が呼び戻されていくようだった。

黒い長髪は頭の後ろでまとめられ、形の良い二つの耳が露になっている。一般の人よりも僅かばかり白い肌は夕闇を吸収して薄暗く染まっていた。

二つの大きな目に綺麗に通った鼻筋。ぷつくりと膨らんだ唇には血が通っていて、綺麗な桜色を思わせる。首の下の鎖骨が妙に強調されて、晩夏の大きに当てられてうつすらと汗をかき、吐息を吐くその姿がひどく官能的に感じた。

「やっぱり須藤君だよ。こんな所で何をしているの？」

身体の形が強調され易い服で、静かにマサキへと歩み寄ってくる彼女。近づいて来る度に頭が混乱しそうになる。

そうしてマサキの一步手前まで近づくと、マサキはようやく声を絞り出して返答する事に成功した。

「散歩、だよ」

マサキの頭の中でひねり出した記憶の一部。小学校以来の異性。初恋の相手。

つまり恋川海咲。こいかわみさきあるいは変態。あるいは宇宙人。

「ふーん、散歩か。最近はこの町にも通り魔が出るようになったから、本当は家にいなくちゃいけないんだけれどね」

マサキを小馬鹿にしたようにクスクスと笑う恋川。中学になつてから、恋川は別の町の有名私立学校に入学したからマサキとはほとんど疎遠であった。

音沙汰もなく、町で会う事も無くなった彼ら。しかしこうして再会すると、マサキの中に不思議な感じが蘇ってきた。

晩夏の涼しい風が二人の間を駆け抜けた。真っ赤に染まる世界に街灯が一つだけ、明暗を繰り返している。

しばらく無言を通していた二人を突き破ったのは踏切の警告音。

「通り魔。そう言えば、僕の学校の女子もそんな話を話していたよ。もう四人目になるんだって？」

マサキの口調はこころなしかいつもよりもっている。初恋の相手との再会の喜びではない。それは言いようのない不安。

「うん。暗い夜道で、女性や子どもが一人の所を狙って。ソイツは自転車で静かに背後まで忍び寄って来て、すぐ直前まで来たら、堅い棒を振り上げて身体はどこかを。ゴッソ」

ドン、と。恋川は握りこぶしを作ってマサキの左胸にそれを強く押し当てた。ねじり込むように、挟み取るように。

昔から変わらない緊張感、それが段々と快感に変わっていく気がした。ねぶるような甘く、ゆっくりとした言葉遣い。小学生の頃と一つも変わらずにいる。

恋川海咲が変態だの、宇宙人だの呼ばれていた由来はこれだ。小学生の頃、マサキをいじめていた恋川の仕掛けてくる挑発的であり、恐ろしい態度。

恐ろしくも官能的な雰囲気にとんと魅かれていった。

「怖いよね。恐ろしいよね。怪我したくないんだったら帰らなきゃ」

三章・疑義

風が悲鳴を上げた。動脈を切り裂いた時に、血飛沫と肉がひゅうひゅうと飛び散る様子にどこか似ている気がした。

マサキの心臓は今にも破裂しそうな程に高鳴っている。あと少し衝撃を加えたら本当に破裂してしまいそうだ。

相変わらず踏切の警告音は鳴り響いている。風の金切り声に乗ってさぞ遠くまで届いた事であろう。

恋川はマサキの左胸に押し当てていた握り拳をそつと解いて、今度はいたわるようにその部分を愛撫する。

細長く美しい指は石膏で造形されたみたいだ。親指と人差し指、中指で布ごしから乳輪に触れるか触れないかの位置で撫で付ける。熱っぽい視線、火照った体を押し付けて。

意味の分からない行動。しかしそれに何も対応出来ないでいる。

恋川は昔からこういった行動でマサキを虐げてきた。

小学生の頃からマサキは内気な性格で、人と関わる事はほとんど無かった。

恋川はその内気な性格を目的として虐げてきたのだろう。

子どもには正義も悪も通用しない、ただ「嫌いだから」というだけで相手をひどく傷つける。恋川はまるでその典型だった。

彼女の前に正しい事とか悪い事なんて存在しない、その人物に興味を抱いたか否かで物事を決定する。

加えて恋川は大人達の前では利口ぶっていたのだから面倒な事この上ない。

マサキに与え続けた女性特有の、肉体的というよりも、精神的に陰湿な虐めは数え切れないほど。

小学校時代、マサキはそんな虐げを受け続けてきた。初めは抵抗すらしていたが、段々とその虐げに順応する形になってしまった。

マサキの周りの数少ない友人がそれを何とか防ごうとした事もあったが、恋川にはまるで効果がない。恐らく彼女にとってマサキとは、都合の良い玩具程度の認識しかなかったのだろう。

だから自分の所有物にしようとして、壊そうとした。

先ほどの踏切でのマサキとの会話から、まだ恋川はマサキを自分の所有物だという認識は消えていないのはずだ。

「この町には様々な噂があつて、だけれどそれらは専ら良い噂ではない」

今まで無言で愛撫を続けていた恋川は、突然言葉を発して行為を中断した。

熱っぽい視線はいつの間にか、蛇のような鋭くも艶めかしい視線に戻っていた。

「須藤君だつてこの町に住んでいるのだから、町の噂くらいは聞いた事があるでしょう？」

静かに始めた会話。左胸から手を離して一步後ずさる。異常に高鳴る心音を必死に抑えようとしながら考えた。

この町、つまり神風町には様々な噂が蔓延っている。それらは専ら良い噂ではなく、むしろ悪い噂がほとんどだ。

立地が悪い事や神風町の昔からの伝統も影響してか、昔から事故や自殺、犯罪が多発する場所である。

不幸な出来事が多発するから現在は県内で最も有名な自殺スポット、犯罪スポットという評価を受けている。一種の無法地帯のような感覚なのだろう。

そんな聞こえの悪い事情は、刺激が不足している中高生には大概心霊スポットのような扱いをしばしば受けている。

近年では神風町へと移住したがる人も極端に少なくなり、町内の若者の数が減少傾向にあるという状況だ。

そんな評価の低い町に住んでいて「黒い噂について聞かない」などという事はありません、だからマサキも自ずといくつかの黒い噂は聞いていた。

根拠の無い怪奇現象。しかしその怪奇現象が何度も多発すると信じざるをえなくなる。

「その噂が、何なの？」

今の状況とはまったく関係無い話にマサキは訝しげに尋ねる。すると恋川は小さな含み笑いを浮かべて、嘲る口調で言葉を発した。

「最近ね、また新しい噂が増えたの。この町で噂なんて珍しくもないけれど、その噂はいつもよりも私達に身近にあつたから」

そう言つて、恋川は一旦言葉を区切つて、再開する。

「須藤君も知つていると思うよ。夏休みが終わる頃、いじめられていた訳でもない女の子が死んだの。自殺した。笑顔で。笑つて」

口元の赤い弧はどんどんと引きつっていき、周りの陽光の赤よりも色濃く見えた。

単語を一つひとつ呟いて、それを繋げず箇条に紡ぐ。無機質な言動が不気味に感じた。

恋川の言葉を聞いた時、マサキは思わずぎよつとして後ずさつてしまった。そうして踏切の中へと踏み込んでしまう。

「その自殺した子は聞くとところによると、須藤君と同じ学校の同じ学年の子だったらいいよ。その子がどうして死んだかは誰にも分からない。この町で意味の分からない死は“噂”にされちゃうから」

恋川が呟いた言葉はマサキの中に染み込んで行く。マサキが何かした訳でもないのに、恋川の言葉に耐えられずにいた。

「“どうしてそれを知っているんだ？”って顔をしてる。結構有名なよ、この噂。それに中高生にとってこんな話は周りを盛り上げるための恰好のネタだしね」

恋川が一步、マサキに近付く。そのたびにマサキは離れる。

晩夏の熱波に当てられているというのに、背筋が凍るように冷たく感じていた。喉の奥がすっかり渴いて舌が張り付いてしまっている。

湿った笑顔を浮かべて恋川は更に言葉を紡ぐ。その表情は言いよりの無い程不気味で。

「その“噂”の子はね、どうやらこの踏切の中で、電車に轢かれて死んだんだって。須藤君が“たまたま散歩で来たこの場所”で」
恋川には既にマサキがここに来た本当の意味を悟られているのだから何度も秋庭美羽とマサキの行動を結び付けたがる。散歩というのはただの上向きの理由にしか過ぎない。

「ねえ、須藤君。あなた本当に散歩でここに立ち寄ったの？」
底なし沼のような黒い言葉に、マサキはたじろぐばかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2599w/>

- 2 -

2011年10月7日03時20分発行